



## 特集

### 政治学・経済学を学ぶ楽しさ

#### ——新入生歓迎シンポジウム——

#### 特集にあたって

本号の特集は、2005年4月9日に、早稲田大学政治経済学会主催でおこなわれた新入生歓迎シンポジウム「政治学・経済学を学ぶ楽しさ」（本文末尾に、プログラムを、付録として収録）と連動した企画である。本誌の発行母体である早稲田大学政治経済学会が、国際政治経済学科の創設を記念して、学生を対象としたシンポジウムをおこなったのは、2004年4月のことであった。幸いなことに、このシンポジウムは好評をもって迎えられ、参加した学生の側からも、「教員と学生とが学問をめぐって議論できる機会をこれからも設けてほしい」という声が多数よせられた。本誌編集委員会では、こうした声の後押しされるかたちで、早稲田大学政治経済学会主催の学術シンポジウムを定例化することを決定した。ここに特集される新入生歓迎シンポジウムは、こうした定例学術シンポジウムの、記念すべき第1回目にあたる。われわれは、「政治学・経済学を学ぶ楽しさ」というシンポジウムのテーマに、新しく政治学・経済学の学問的コミュニティに参加することになった2005年度早稲田大学政治経済学部1077名の新入生ひとりひとりに対する歓迎の意を込めた。

本シンポジウムは、教員からのメッセージ、学生からのメッセージの2部構成でおこなわれた。第1部では、現在、早稲田大学政治経済学部で教鞭を執る、須賀晃一、清水和巳、谷澤正嗣の三氏に、これから新しく経済学・政治学という学問に取り組もうと考えている学生を対象として、それぞれ20分ほどの時間で講演していただくことをお願いした。須賀、清水両氏からは経済学の立場からの、谷澤氏からは政治学の立場からのメッセージを、それぞれ期待したわけである。しかし、伝統的な政治学・経済学の境界にとらわれず、新しい政治経済学の確立をめざして旺盛な研究活動を展開している三氏だけあって、当日の講演は、いずれも、政治学と経済学の共通性と異質性を意識しつつ、もっぱら方法論的な見地から学問の意義を解き明かそうとする、きわめて意欲的なものとなった。

第2部では、今坂つばさ（早稲田大学大学院政治学研究科修士課程1年）、榎田寛之・酒井洋輔（いずれも早稲田大学政治経済学部経済学科4年）の三氏に、学生の視

座から、政治経済学部で学ぶ意義と可能性について語ってもらうことをお願いした。かれらは、いずれも、政治経済学部の学生を対象としておこなわれる論文コンクール（これも早稲田大学政治経済学会が取り組んでいる重要なプログラムのひとつである）において、2004年度の優秀賞に輝いた実績をもつ。このたび、シンポジウムの趣旨を説明し協力を求めたところ、こころよく報告者の役割を引き受けてくれた。今坂、榎田、酒井三氏とも、論文コンクールにおけるみずからの受賞論文の単なる紹介にとどまることなく、そうした研究を志すにいたった動機や、モデルの発想のしかた、授業や学問に向き合うときの心構えといった幅広い主題を、きわめて具体的に、そして身近な言葉で、時に熱く、時にユーモラスに語ってくれた。かれらの言葉が、どれほど参加者の心をつかんだかは、質疑応答や懇親会を通じて、多くの学生たちがかれらとの対話を望み、人だかりを作っていたことのうちに、なによりも、雄弁に示されていた。

本特集に収録した3つのエッセイは、このシンポジウムの第1部でおこなわれた講演に基づく。本誌に収録するにあたり、講演者には、当日のシンポジウムの雰囲気を残しつつ、新しく原稿化することをお願いした。これらのエッセイは、話し言葉で、やさしく書かれているという意味では、初学者向けではあるものの、そこで語られている内容は、政治学・経済学をはじめ、社会科学一般を学ぶうえでの本質的な問題を含み、学習・研究が深まるにつれて、くりかえし吟味されるべき内容を含んでいる。これらのエッセイから、経済学・政治学の初学者はもちろん、すでにある程度これらの学問に関する研究を蓄積してきた学生・研究者も、それぞれの関心に応じて、さまざまな示唆とインスピレーションを引き出すことができるであろう。これらのエッセイを、本誌の特集として、世に問うゆえんである。

シンポジウム当日は、新入生を中心に、およそ200名の参加者をみた。活発な質疑応答が、第2セッションの報告終了に引き続いて、予定の時間を30分超過するまで行われた。参加者から出た質問は、就職か大学院進学かを、いつ、どのように決めるべきか、また、そのためには、どのような勉強を、どのくらい行えばよいのかといった具体的なものから、客観的な学問としての政治学と実践的な政治活動との距離を、どのように考え、行動すべきかといった本質的なものまで、多岐にわたった。フロアとパネリスト、またパネリスト相互の対話は、時に、大学における講義の意味といったきわめてアクチュアルな問題へも発展した。場所を移しての懇談会でも、多くの参加者のあいだでの和やかな議論が続けられた。とりわけ、学生のプレゼンターたちが、多くの新入生たちに取り囲まれて、質問攻めにあっている姿が印象的であった。

シンポジウムを通じておこなわれた、こうした対話のすべてを、ここに再現することはできない。しかし、そのうちの重要なもののいくつかは、各論者が、講演を原稿化する過程で、エッセイそのもののうちに反映されているはずである。特集を編むに

あたり，シンポジウムに参加して下さったすべてのみなさんに，この場を借りて，あらためてお礼を申し上げたい。

(特集ならびに企画責任者 梅森直之)

## シンポジウム・プログラム

日時：4月9日(土) 13:30～15:30

場所：早稲田大学西早稲田校舎3号館4階 402教室

司会 梅森直之(日本政治思想史担当)

13:30 開会の言葉

藪下史郎(早稲田大学政治経済学会長・政治経済学術院長，貨幣理論担当)

13:40 第1セッション：教員からのメッセージ

報告1 須賀晃一(公共経済学担当)

「論理的思考のための道具箱：政治学・経済学と数学」

報告2 清水和巳(経済学史担当)

「人はなぜ経済学を嫌いになるのか：モデルと現実」

報告3 谷澤正嗣(現代政治学説担当)

「政治学の方法と問題：カンタンな取り扱い説明書」

14:30 第2セッション：学生からのメッセージ

報告1 今坂つばさ(早稲田大学大学院・政治学研究科)

「政党リーダーの言説への評価と投票行動」

報告2 榎田寛之・酒井洋輔(経済学科・秋葉弘哉ゼミナール10期生)

「中国人民元と均衡為替レート」

15:30 懇談の会：3号館2階第1会議室

主催：早稲田大学政治経済学会

後援：早稲田大学政治経済学部・21 COE-GLOPE